

〈調査報告〉

## 中国の博物館・美術館訪問記(下)

杉本 憲司

福建省の博物館・美術館の見学は、日本人にとって「茶の文化」と密接の関係がある陶磁器と茶の生産地であり、中国の茶文化を知るために、はずせないところである。お茶の好きな人で個人的に福建を訪問すること何十回という話を聞いたことがある。また歴史的にも福建と沖縄、すなわち琉球国との関係も忘れてはならない点である。このようなところをいかに見学するかは、個人の興味の持ち方で変わってくるが、今回は茶文化に少し重点をおいてみていきたい。

福建にいくのには、廈門市の高崎空港にいく直行便が、一番便利であるので、省内の旅も廈門から始まることになる。廈門市は日本でも知られる鄭成功がここを本拠地として、長崎との間に関係があったことで、早くから港として日本に知られていた。

最近、中国の発展をうけて廈門も経済的な重要都市となりつつある。この新廈門の経済特区に「廈門市博物館」が鼓浪嶼から移転してつくられた。ここは博物館以外にも図書館、芸術館、科学技術館がつくられ、廈門文化芸術センターを形成している。市博物館は市域から蒐集された文物、絵画、書、陶磁器が陳列されていて、廈門地区の歴史・文化を知ることができる。

南中国から多くの中国人が海外に進出していったが、そのような人を華僑といい、アジア各地・欧米で商業・貿易・手仕事で活躍して、その経済力は大きく、孫文の清朝を打倒した辛亥革命を経済的に支えたのは、この華僑の経済力によるところが多かった。この華僑の歴史を中心に展示しているのが「華僑博物館」である。また、この博物館を建てた華僑指導者の陳嘉庚氏が蒐集した「珍藏文物展」の部屋には、中国古代からの青銅器、陶磁器、書画があり、そのコレクションの質の良さと量には驚かされる。

廈門市でもう一つの博物館は「廈門大学人類博物館」である。この大学

の法学院におられる周東平教授が、かつて私の研究室に留学していたことがあるので、今回は大変お世話になって見学することができた。大学教育上の場としての博物館であるので、一応、中国の歴史を先史時代から現代までが理解できるようにした展示と、人類学に関する中国東南区文化と南洋文化に関する展示、とりわけ少数民族の畚族や台湾高山族の服装・道具の展示は特徴的で勉強・研究の助力になる。

廈門から北上して泉州市にむかう。海岸に近い道を北上するが、その途中で車の窓外の風景と、休憩で止まった時にみた風景で、現代の中国経済の一端にふれた。それは工場の多いことである。話によるとスポーツ関係の靴などを生産しているところが多いようである。もう一つは、この地の名産でもある石で、庭園などに置く石刻や墓石などに使用されるもので、これらの中には日本への輸出品のものも多くあるようである。

歴史遺産としては、晋江にある石造の「安平橋」がある。泉州は中世時代には貿易港として栄えるが、海のシルク・ロードで入ったものが、陸路、中原の洛陽・長安にむけていく陸のシルク・ロード石橋の一つである。今見学できるものは宋代につくられたもので約2000m(石橋では世界一)におよぶ。また、橋には多くの石碑がみられる。

泉州市は地方都市であるのに、多くの遺跡・文物がみられるのは、それは海港都市として東南アジア・西アジアの南海の蕃船があつまるところであったからである。特に宋代以後は「市舶司」という対外貿易担当の役所がおかれてからはますます発展し、元代にはアラブ人の蒲寿庚が重用されて、更に港湾都市として発展した。これらのことから泉州には多くの外国人(蕃客)が渡来したり、居住した。このために泉州市内には見学すべき場所が多くある。

開元寺は唐代に創建された二塔(鎖国塔と仁寿塔)が並び建ち、寺内には大雄宝殿、甘露戒壇などの伽藍がある外、「泉州仏教博物館」、「泉州湾古船陳列館」がある。特に古船陳列館には沈没した木造船を発掘して、復原したものを陳列している。また「中国歴代船舶模型陳列館」には、精巧につくられた船舶模型が並べられていて、中国の船舶の歴史を知ることができる。模型の中には販売されているものもあるので、舟好きの人にとって

は大変興味をそそられる。

「泉州海外交通史博物館」は、泉州の持っている海外との関係を知る為には絶対はずせない博物館である。ここにある「泉州宗教石刻陳列館」には、外国商人が泉州に伝えた多数の非漢語資料が展示されている。アラビア文字の碑文やキリスト教(景教)碑文からは、当時の泉州のもっている国際性がわかる。また、ここには、館外の庭にイスラム教徒を埋葬した須弥座式石墓が30~40基みられる。この外、ヒンドゥー教寺院の石柱もおかれている。

この博物館からすぐのところに、「イスラム教聖人墓」もあり、三賢・四賢墓といわれている。この外、市内にはイスラム教寺院の「清浄寺」があり、火災などで少しいたんでいるが、ほぼ元の姿をとどめている。寺内にはイスラム教徒の墓碑が多くあつめられている。

福建省の省都である福州に行く途中に、もう一つの港から中原に行く交通路の石橋がある。それは「洛陽橋」である。それを見学した後、北上して福州に行く時に、海岸に近いところの「崇武古城」を見学する。これは後期倭寇の倭・華混合の海賊に備えた古城で、海に面して城壁を持つ城で今も城内に多くの人が生活をしている。

福建省にはいる。福建とは「福州」と「建甌」という二つの都市を合わせたもので、唐代の「福建経略史」にさかのぼるが、歴史的には地名としては「閩」といわれ、今でも福建省の一字による別称としては「閩」といわれている。これは、今の福建省より西北にある、世界遺産の武夷山から流れる全長577kmの閩江からつけられたものである。

福州市の西北、閩江下流北岸の閩侯県甘蔗鎮曇石山に、新石器時代から青銅器時代にかけての大きな遺跡があり、今はここに「曇石山文化遺址博物館」がある。この遺跡は貝塚をもつ集落で、まわりに環濠をもつ住居址がある。出土遺物には石器に小型の石斧が多くあり(鉞型石器、有段石斧、石鎌など)、土器は粗砂縄文陶が中心で、轆轤の使用が認められ、灰黒色のものが多い。器形には三足器もみられ、釜形鼎、釜、缶、豆、簋などがある。一部に赤色の彩文もある。環濠集落であり、墓葬は公共墓地で男女

合葬がみられる。遺跡と博物館が一体になっているので、楽しいところである。

福州市内の最大のもは「福建博物院」である。省レベルの大型総合博物館で、考古・歴史・自然・芸術・民俗の陳列室があり、国家一级博物館にも認定されている。ゆっくりと館内をみることがなかったが、展示中止の部屋もあって、考古と民俗の部屋だけは見学した。また、福建省関係の展覧会(「東アジアの海とシルクロードの拠点福建—沈没船・貿易都市・陶磁器・茶文化—」)を愛知陶磁資料館、学習院大学、明治大学、山口県立萩美術館、浦上記念館と私達の佛教大学宗教文化ミュージアムで共催したこともあって、私は展覧資料調査のため省博物館資料室、写真室などに入ったこともあって、思い出の多い博物館である。

福州は、明代に外交での交易や人物の交流をつかさどる「市舶司」という役所がおかれていたが、ここに多くの琉球人(今の沖縄県人)がやってくる。それは琉球王国成立前後(1429年)からはじまり、14～15世紀に本格的になる。これは琉球が明朝との間に冊封関係を結んだことによる朝貢貿易がはじまり、明朝から陶磁器を中心とする品物が入り、これは遠く日本や東南アジアへの中継交易品として運べる。これらのことから、多くの琉球人が福州に、中国人は琉球に、それぞれの宿舎をつくる。福州には、今でも「琉球館」が残る。2階建ての木造建築で、見学ができる。また「福州博物館」には、福州でなくなった琉球人の墓碑が何点か残され保存されている。中国側の人で琉球にきた人々は、久米村(現、那覇市久米)に華僑社会をつくって居住していた。

福州から閩江を上流にさかのぼっていくと、日本の茶人にとっては垂涎の器である、油滴天目茶碗の産地である「建窯」址にいくことができる。これ以外の陶磁器も福建でつくられている。福建省内の窯でつくられたものは、福岡市博多区の鴻臚館遺跡から出土するが、これは唐代末期からはじまり閩江下流の窯で焼かれたものである。その後も福建でつくられたものが多く入るが、この中に鎌倉時代に入ってくる建盞、唐物茶入れ、天目は閩江流域の窯で焼かれ、閩江を下り福州から日本に運ばれ、大商人、武家、寺院のところに入り、日本の茶道具の中心になっていく。



この陶器が焼成される窯は閩江上流の支流域の建陽市(現、南平市建陽区)にある。

「建陽市博物館」は、市域の文化財全般にかかわっていて、羅冠群館長は丁寧に出土品や複製したものの展示を説明してくれる。中にはいわゆる国宝クラスのものもある。また、ここで出来のよい複製品もつくられていて、これは購入可能である。

ここで館長の案内で窯址を見学に行く。道がせまいので、マイクロバスで入ることになる。一つの大きな谷の谷面にいくつかの窯址(水吉窯址の大路後門山遺跡、営長乾遺跡、蘆華坪遺跡)がある。窯址の前面には大きな灰原があって陶器片が多くみられる。窯址には原則として柵がしてあって入れないが、地元の人の上の方から入り、良い破片を拾っていて、それを売りつけてくる。陶器好きな人には、一日中破片拾いをしても楽しいところである。

建陽の少し南にある建甌には、宋代の皇室茶園である「北苑茶園」がある。ここでは宋一代を通じて最高の龍鳳団茶(固形茶)がつくられていたが、宋王朝崩壊と共に茶園が荒廃していった。今日は調査の結果、建築址、竈址、水路、井戸址、ため池など製茶の施設がみられる。更に、ここから谷の奥に入ると、花崗岩(高さ4 m、幅3 m、奥行き4 m)があり、そこに全8行、1行10字、全80字の碑文が陰刻されている。

石刻碑文を氣賀澤保規(明治大学)氏の読みで以下に記す。

建州(建甌市)の東、鳳皇山、厥れ宜き茶を植えるは  
惟れ北苑。(北宋)太平興国(978~984)の初め、始めて  
御焙を為り、歳ごとに龍鳳(茶)を貢ぎ上る。東は東宮、  
西は幽湖、南は新会、北は溪(の範圍)に、三十二焙を属ね、  
署、暨び亭樹有り。中は  
御茶堂と曰う。後ろに坎泉ありて甘し、之に宇して  
御泉と曰う。

前に二泉を引き、龍鳳池(龍池・鳳池)と曰う。

慶曆戊子(八年。1048年)仲春朔(2月1日)、柯適記す。

この碑は、今は日本の茶道研究家、林屋晴三氏の寄贈で屋根がつくられ、

附近も整備されていて、少し行くのに距離があるが、今は見学することができる。

建陽から北上すると、ユネスコの世界遺産に登録されている武夷山に行くが、ここに行く途中に、漢代につくられた城址がある。

福建地方は古代では閩越族の世界であったが、戦国・秦・漢時代になると、秦では閩中郡が、漢代には閩越国がたてられたが、この時代のもので、もっとも注目されるのは、武夷山市城村にある「武夷山漢城」遺跡である。今日までの調査で、周囲2900m(南北860m、東西550m)、城壁の高さは4～8 m、幅4～8 m。中央に大きな宮殿址がみとめられ、ここから「楽未央」「常楽万歳」の文字瓦当が出土している。これは漢で王莽の「新」にかわった時に、「長楽宮」が「常楽宮」に変えられた時期のものであることが考えられる。「漢城」といわれているが、地元でいっている「閩越王城」という言い方も通用されてもよい城址である。しかし、文献では漢・武帝の時に閩越も東越も滅んでいるので、この名称も問題が残る。現在、ここにある「閩越王城博物館」が休館中である。

この城址から少し北上すると、世界遺産に登録されている「武夷山」に行くことができる。ここは「九曲溪」という水のきれいな谷川があり、この川の兩岸の山全体が武夷山で、特に天游峰は200数mのほぼ垂直に切り立った岩盤の山で、山頂まで道が整備されていて登ることが可能である(私は年で足が弱くなっているので登っていない)。この附近の岩壁や谷の平地には、元時代以来、最高価のつく有名な武夷岩茶のブランド「大紅袍」(烏竜茶)の茶畑が続いている。少し値段が高いので、ふところと相談して購入すれば、自分用にも、知人へのお土産にも最高である。

またここには、南宋時代の黒釉磁を焼いていた遇林亭窯の遺跡があり、窯址の上には屋根がかけられて保存されている。この産品は、日本伝世の「金彩文字天目」(茶碗)の特徴とほぼ一致している。

この外、武夷山で注目されるものが二つある。一つは清流の九曲溪兩岸の奇岩のながめの中で、崖につくられた古越族の崖墓である。船上から兩岸の崖上をみると、どのような方法で、この様な崖に木棺を入れる方法をとったのか、まだ充分解明されていないものを眺めることができる。

もう一つは、南宋時代の儒学者で、宋学を大成した人物の朱熹が、ここに「紫陽書院(武夷精舍)」を創設したが、現在は同地に建物が復元されている。中には宋代の壁の一部が残されているものが組み込まれている。

さてここで福建の宋代の学問の様子について少し述べておこう。北宋・南宋時代を通じて、当時の福建路(現、福建省)は、高級官僚の科举合格者が全国一である。それは、一つは朱熹がここに書院をつくって教育したばかりでなく、科举受験のための参考書である書籍が、ここで多く印刷されていて、宋代の出版の中心地にもなっていたからである。また、朱熹が大成した朱子学は、福建出身の黄幹、陳淳、真徳秀ら多くの弟子や後継者によって広められ、朱子学関係の書籍の出版・印刷業も隆盛を極めた。

廈門市街からわずか数分の海を渡ると、そこに鼓浪嶼(コロンス)島がある。ここは近世・近代の関係のものが多くみられるところである。アヘン戦争後の帝国主義国家による中国進出の一つに開港の要求があり、南京条約(1842年)で、廈門が開港されると、このコロンス島に各国の共同租界地がおかれ、各国の領事館がおかれ、今日、その建物がみられる。旧日本領事館、旧スペイン領事館などがみられる。歩いていると外国人のための学校、教会や日本の警察署址もある。また外国人が住んでいたのもので、ここは特にピアノが普及したので、ピアノ島とも称せられていて、音楽学校もいくつかおかれている。島の中央の日光石がもっとも高いところ(92.68m)で見晴らしがよいので登る価値がある。

福建での見学する価値のあるものに、福建西部にある客家<sup>はっか</sup>の村にある土楼があり、そのいくつかが見学できる。私が見学したのは、華安県仙都鎮大地村の「大地土楼群」である。客家とは六朝時代頃から、唐・宋代にかけて南下して、江西、福建、広東の三省境地区から、更に広西、海南、四川や台湾から東南アジア各地に広く居住している漢民族であるが、先住者をさけて山間の狭い平地に孤立隔絶した居住している。後から入って来たので「客」といわれ、大家族制を保持して集団で居住した。彼等は強力な家族組織を保ち、多子多孫をもって幸福とした共同生活・大家族制を維持しているが、それを支えているのが「土楼」といわれる共同生活の場である。いわゆる大型の一族が居住する今風のマンションで、それには中庭を

持つ方形と円形のものがある。

「大地土楼群」の中で、東陽楼(方形土楼)と南陽楼(円形土楼、福建土楼博物館)を見学して、各地に残っている土楼について、写真・説明文を見学して知ることができた。

雲南省のごく一部だけを見学したときの様子を述べてみよう(2013年 3月20～26日)。

中国最南の省の一つで、ベトナム、ラオス、ビルマと国境を接し、また少数民族の多い省で、漢族以外に彝、白、哈尼、壮、傣、苗、傈僳、納西、瑶、景頗など25種が居住している。地理的には、青藏高原の東南延長部分で、西北より東南に傾斜している。長江上流の金沙江などと、南への珠江の水源地であり、高原の間には滇池、洱海、撫仙湖などの高原湖泊がみえる。省の平均海拔は約4000m あるが、2000m のところが多い。

気候はインド洋、太平洋の季節風があり、年間の温度差が少なく、動植物にとって良好な土地で「一山有四季、十里不同天」という諺言もある。

ここで少し雲南の歴史をみておこう。見学・参観するのに少しは役に立つと思う。中国全体の旧石器時代でも、特に、中国の最古ともされる「元謀人」の発見された地で、多くの史前遺跡が発見されている。歴史文献の記載によれば戦国時代、楚の莊騫が滇中に進攻し(B.C. 279年)た後、秦もここを占拠したが、莊騫がここにとどまり、「滇国」を建立していた後、漢の武帝時代の領土・支配拡大で、正式に漢の支配下にはいって属国になり、「益州郡」が置かれた(B.C. 109年)。この頃に滇王は「滇王之印」の金印を武帝より賜っている。

後漢時代には哀牢夷が内附して「永昌郡」がおかれ、三国時代には蜀の一部で「南中」といわれ、蜀将諸葛亮がここを「建寧郡」、「雲南郡」、「興古郡」として支配した。唐代には「戎州」「姚州」の二都督府をおくも、天宝年間には統治権を失う。蒙古のフビライが大理征伐したが、「南詔」、「大理」の地方政権は存在していた。元は「雲南行中書省」を昆明におき、「雲南省」とした後、今にいたっている。

雲南の省都昆明に入るには、日本からの直行便がないので、北京か上海



を經由して、中国国内便にのりかえてはいる。昔は昆明市内に空港があったが、今は郊外の「昆明長水空港」にはいり、バスか空港線電車で市内にはいる。今回の旅ではバスで市内にはいり、おそい夕食を市内のレストラン「老東粥皇茶餐厅」で食べてからホテル(錦江大酒店)にいった。

3月21日は市東郊にある自然世界遺産である「石林」に行く。14年前にはここに市内から普通バスで古い街の間を通っていった。その時はその時で民家の低い屋根を窓のすぐそばに見たり、石林近くなってくると民家の庭に石柱が生えているのを見て楽しんでいったが、今は高速で公園の入り口に直行で、時間が早い面白味は消えたようである。今の石林は一大テーマパーク風になり、入り口でカート車に乗せられて、面白い場面だけを選んで歩いた昔とは異なり、用意されたルートを見学していくことになる。先回は「世界緑樹記念展」の時であったが、中国人が少なかったのに対して今回は中国人観光客の多いのに、中国の人々の経済力の向上を実感する。大石林、獅子台(カートをおりて徒歩で山登り)、小石林などを見学する。

午後は澄湖化石虫出土地と、研究所、陳列館の見学に行く。ここは考古年代では考えられないはるか大昔の話のところである。それは地球の歴史で「原生代」の最後の「カンブリア紀」にあたる地層があるところで、約500万年前とされている。世界でこの地層が地上近くに露出しているところは、カナダのバージェス頁岩発見地(ブリティッシュコロンビア)、グリーンランドのシリウヌ・パセットと、今回、見学した昆明市の南にある大きな湖「滇池」の東岸山中にある。ここは全山化石が露出していたりするので、一切石をとることは禁止されている。世界的に有名な地であるが、保護のためにはなるべく人をさけたい場所である。ここでは「澄江古生物研究站(施設)」の附属である「澄江動植物第一発見地点」展覧館を見学する。とにかく、私にとっては初めてのものであるので、興味心が高まり楽しいものであった。甲虫状の「三葉虫」、鰓曳状の「ヒオリラス類」など絵で見、実物の化石を見る。私には全く門外漢のものであるが、想像の世界を楽しませてくれる。

続いて中国社会科学院南京地質古生物研究所の呉先生の案内で、「澄江

古生物研究站」「展覧館」を見学して、説明をうける。今は発掘をやめて、出土化石の整理分類、研究をやっているとのことである。我々以外に、若い学生数名が見学に来ているだけで、世界遺産であるが、素人の見学者を余り歓迎しない風である。

夕方、出発して滇江の南にあたる玉溪市に行き、ホテル「中玉酒店」に宿る。このホテルでは風呂が使用できず、少しがっかりする。それでも今日は地球上では人間などはたいしたものではないことを感じた。

今日は、昨日とちがって人間の歴史についての遺跡・文物の見学にはいる。ホテルを出発してすぐにある「雲南李家山青銅器博物館」に行く。ここには町の北にある李家山古墳群より出土した青銅器の逸品が陳列されている。今回は特に国宝「牛虎銅案」は残念ながら北京の「国家博物館」に出展されていて、復刻品が陳列されていた。青銅器中心の陳列であるが、非常に力を入れた良い陳列が2室にわたってあって、目を楽しませてくれる。他に金器、玉器、漆、竹、木器などがみられる。

別の部屋では、町の北側にある「星雲湖」と「撫仙湖」の漁業を中心とした、現在の産業、生活などを写真と実物の漁網などを展示していて、この地方の生活・産業を紹介した社会教育的な展示としてはすぐれたものであった。

博物館から北、星雲湖の西岸の江川県城の北西の山上に「李家山古墓群」がある。町から急な坂道、石段約600m登った山頂に「李家山古墓群」がある。調査(1972～92年)された古墓は86基あるが、私がいった時には5基の墓坑(戦国時代晩期～後漢時代)が残されていた。下りは逆方向の坂道を大変苦労しながら下りてきた。遺跡見学には時々地図では近くにみえるが、行ってみると登りがあつたり、道が整備されていなかったりして難渋する。

遺跡見学後、「玉溪市博物館」を参観する。ここは市域全体の通史的博物館で、恐竜時代の化石から、石寨山を中心とした青銅器など多くあり、また遺跡地が見学できなかったところの遺物があり、大変参考になる博物館で、予想以上によかった(館長陳泰敏氏の接待あり)。

金印「滇王之印」が出土した石寨山遺跡の見学は、今回のハイライトの

一つである。場所は晋寧県上蒜郷石寨村の東南部の山上にあり、西、滇池より約1 kmである。石寨山(別名 鯨魚山)は高さ1919mであるが、比高では村から33m位で、村の朝市の中を登っていく。山上には南北168m、東西113mの範囲に墓が造営されていて、現在は墓地全体が鉄柵でかこまれている(南北168m、東西113m)。一応、柵外から全体を見学するが、中に入ることもでき、金印「滇王之印」の出土した6号墳は側で見ることができた。現在、墓坑が残されているだけである。この墓地は滇王一族を中心とした墓地で、滇文化を研究する原点である。報告された出土品をみると滇文化の真髄をすることができる。今回、ここを見学後に、予定していない新しい博物館の「昆明市博物館」を参観した。ここには青銅器文化室があって、新しい出土品を含んだ石寨山の発掘品が収蔵されて展示されていて、これは大変良い展示で、参観する値打ちがある。

「雲南省博物館」は、嘗て見学した時からは大変化した新しいものであった。省の博物館であるので、雲南省の特色である多くの少数民族の展示室がある。ゆっくり見学する必要があったが、時間に余裕がなく早足で参観しただけで、私たちの興味を中心である滇文化の展示室の参観に行く。館の説明人がついて案内してくれるので、一般の人にとっては大変便利である。特に注目されたのは小学生上学年の少年が、博物館や滇文化に大変興味を持ち、自ら展示説明を館の人の指導をうけて行なっていて、日本でも、このようなことがあることを望みたい。滇文化の展示で、特に注目されたのは、他の地域の文化をどのように受け入れたかについて、広く北方の文化、シルク・ロード地域の文化、中原文化、四川の文化、南方の文化の関係がくわしく展示品を通じて説明している。滇文化そのものについては、銅鼓を時代順に並べその飾りを中心に展示、説明はよくできているが、銅鼓は複製品の展示が多いので、その点は少し残念である。

次の見学地は、昆明市街から西方の楚雄彝族自治區の楚雄市内の博物館である。昆明市内から高速道路を利用して混雑に会うことなくいく。その途中で「緑豊恐龍谷」の側を通る。この附近は恐龍化石が多く発見される場所であり、少し北には「緑豊古猿」化石・「元謀人」化石の出土地域があり、化石時代から旧石器時代前期の化石・石器などの研究には重要な

地点である。今回は現地にいけずバスの車窓から、はるかながめるだけであった。

楚雄市には、「楚雄彝族自治州博物館・文物庁」があり、自治州の化石・文物などが展示されている。案内には彝族の音楽家である李小艾女史がついてくれた。先づ注目される展示は、楚雄地区の化石・恐竜展示室である。実体に復原された恐竜の姿には圧倒される。旧石器時代の展示は、小さい部屋であるが、一応、楚雄の旧石器文化のことがよくわかる展示である。市内の「万家壩遺跡」出土の青銅器は、省博物館よりはくわしく展示され、有名な銅鼓の展示は圧倒的であるが、実物は一点だけで、他は複製品である。

午後は、市内の「万家壩遺跡」を見学する。今は碑石があるだけで、附近の地形を観察するだけである。博物館にもどり「少数民族展示室」をみる。博物館が斜面にあるので、展示室が階段でつながっていて、変化の富んだ楽しみもある。

昆明市内で少し楽しみを行った。それは「雲南省文物考古研究所」(所長・劉旭教授)を訪問して、所長以下二名の先生方から省内での最近の調査・研究されていることを教えてもらったことである。一つは楊帆教授より、文山州広南県牡宜甸町の貴族墓の発掘について話してくれ、甸町王国の位置についての一説も話してくれた。蔣志竜教授からは、「澄江学山聚落遺跡」についての話しがあった。明代の澄江府の官衛遺跡と、その下層にあった戦国時代の青銅器を多く持つ集落と墓地の報告があった。遺跡ははるかに遠い地であるが、雲南省の古代文化を考えるのによい参考をいただいた。

現在、今まで昆明市中心部にあった大学・研究機関は、ほとんど、昆明東南部、滇池の東側にある「呈貢区」の大学村に移転している。新市街に各大学は大きな校区と、新しい大きい建築物によってつくられている。この中にある「東南民族大学」の民族博物館を、玉腊教授女士の案内で見学をした。大きな一フロアの展示室に、雲南省内の少数民族の文化を各コーナーごとに展示していて、一目で雲南省内のすぐれた現在の民族文化を知ることができる。



以上、上・中・下で北中国から南中国までのごく一部の省で博物館などを見学旅行をしたときのメモである。まだこれ以外の地域もあるが、それは割合した。

**キーワード：中国、博物館、美術館、考古学、遺跡・遺物**